



いたびつ **板櫃** <校訓>  
真理の探究  
自主躍進

令和6年7月5日(金)発行  
校長 栗原博巳  
北九州市小倉北区白萩町8番1号  
HP: www.kita9.ed.jp/itabitsu-j/

<学校教育目標>  
自立・共生～自立心にあふれ、他を思いやる心をもった生徒の育成～  
<目指す生徒像>  
①「時を守り、場を清め、礼を正す」生徒(凡事徹底)  
② 自ら考え、正しく判断し、進んで学習や諸活動に取り組む生徒(自立)  
③ 思いやりの心を持ち、協力し合って集団生活の向上に努める生徒(共生)  
④ 与えられた仕事に対し、役割を果たすことのできる生徒(責任)

## 豊かな心のために～大切にしたい季節を感じる行事～

7月7日の七夕(たなばた)といえば、織姫と彦星が年に一度再会する日、短冊に願いを書いて星に願う日として有名ですが、どうしてそのような日になったのでしょうか？七夕を「たなばた」と読むのはなぜでしょう。

七夕の由来・起源や意味を知ると、行事の意味がわかります。七夕の本当の意味を知り、有意義に過ごしたいものです。今は本物の笹を飾る家も少なくなってきました。各家庭でも、短冊に願いを書くこともあると思います。3年生は部活動や進路に関する願いが多いと思います。みなさんの願いが叶うといいですね。



### 七夕の由来・起源や意味……様々な伝説が結びつき現在のたなばたへ

七夕は五節句のひとつで、縁起の良い「陽数」とされる奇数が連なる7月7日の夕べに行われるため「七夕の節句」といいます。また、笹を用いて行事をすることから、別名「笹の節句」と呼ばれています。七夕は、中国伝来の【七夕伝説】と【乞巧奠(きっこうでん)】に、日本古来の【棚機つ女】の伝説や、【お盆前の清めの風習】などが結びついて、現在のようなかたちになりました。

### 七夕伝説(星伝説)が、たなばたのルーツ

七夕のルーツは、中国伝来の七夕伝説(星伝説)にあります。いくつかの説がありますが、一般的な伝説のあらすじを紹介します。

天の川の西岸に住む機織りの名手・織姫と、東岸に住む働き者の牛使い・彦星が、織姫の父親である天帝のすすめで結婚したところ、仲睦まじくするばかりで二人とも全く仕事をしなくなってしまいました。これに怒った天帝が、天の川を隔ててふたりを離れ離れにしましたが、今度は悲しみに明け暮れるばかりで働かなくなってしまいました。そこで、仕事に励むことを条件に七夕の夜に限って再会することが許され、七夕になると天帝の命を受けたカササギの翼にのって天の川を渡り、年に一度、再会するようになりました。

というお話です。年に一度の逢瀬から、七夕のメインテーマは恋愛だと思われがちですが、ふたりが引き裂かれ再会に至る経緯に、七夕の本意があらわれています。

### 中国伝来の儀式・乞巧奠(きっこうでん)が、今の七夕行事につながる

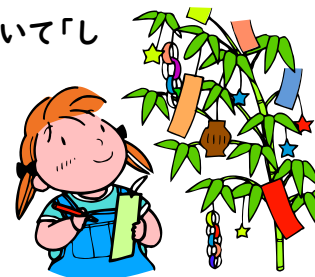
七夕伝説の織姫と彦星の逢瀬を祝い、織姫にあやかり機織りなどの技芸の上達を願い、巧みになるように乞う祭り(奠)と言う意味の「乞巧奠」が中国で催されるようになりました。

奈良時代に乞巧奠が伝わると、貴族は庭に祭壇を設けて供物を供え、梶の葉に和歌を綴ったり、7本の針に五色の糸を通して裁縫の上達を祈ったり、角盥にはった水に星を映して眺める「星映し」などを行うようになりました。また、里芋の葉を天帝の水を授かる傘ととらえ、里芋の葉に溜まった夜露で墨をすって文字を書くと、願いが叶うとされています。



### 七夕を「たなばた」と読むのはなぜ？棚機つ女(たなばたつめ)の伝説

「乞巧奠」が七夕の節供に変化していきましたが、もともとは七夕と書いて「しちせき」と読んでいました。七夕を「たなばた」と読むようになったのは、日本古来の「棚機つ女(たなばたつめ)」の伝説に由来します。「棚機つ女」とは、神様を迎えるために水辺に設けた機屋に入り、棚機(たなばた)と呼ばれる機織り機で神様に捧げる神御衣(かみこ)を織りあげる女性の話です。そして、中国の織姫と日本の棚機つ女が結びつき、七夕と書いて「たなばた」と読むようになったのです。



### 七夕行事とお盆前の風習

七夕の行事には、水が関係しています。これは、天の川との結びつきだけではなく、お盆前の清めの風習にも関係しているからです。旧暦のお盆は7月15日なので、7月7日はお盆の準備をする頃にあたり、お盆前に身を清めたり、井戸をさらって梅雨どきにたまった不浄を清めたりするなどの習わしがありました。今でも「七日盆」(なぬかぼん)といい、墓掃除をしたり、仏具を洗ったり、墓参りの道を掃除したりする習わしが残っています。やがてこれらが結びつき、江戸時代に七夕の節句が五節句のひとつに定められると、人々に親しまれるようになっていきました。七夕の後、七夕飾りを川や海に流す風習を「七夕流し」といい、七夕飾りが天の川まで流れ着くと、願い事が叶うといわれています。



日本には四季折々の美しい習慣があります。そのなかで生まれた季節の風趣や楽しみごとが現代まで継承されたのが、年中行事です。自然や祖先に想いを馳せ、古来の日本人がつないできた日本の年中行事を大切にしていきたいものです。(大人になると忘れがちですが)※「ほんとうに大切なものは、目に見えない」 サン=テグジュペリ

# 子どもの5つの力を育む[行事育]とは？

行事には家族が笑顔でいてほしいという愛情がこめられている

日本の行事は、家族の幸せを願う気持ちを形にしたものです。もともとは宮中行事や農耕神事として始まりましたが、時代とともに家庭に入ってくると、幸せを願う対象が家族に向いていきました。行事は文化であり、そこには「家族が笑顔でいてほしい」という愛情がこめられています。たとえば、お正月に家族や親戚がそろい、おせち料理を囲みみんなの笑顔を見ていたら「幸せだなあ、来年もこの幸せが続くといいな」と感じませんか。行事育のベースは文化と愛情なのです。子育て中の今だからこそ、子育てを豊かにする行事育のよさを知って実践してみてください。

行事を楽しむことで育まれる5つの力

家庭で行事を楽しむことで、「根っこになる」「絆になる」「心豊かになる」「賢くなる」「元気になる」5つの力を育むことができる、それが行事育です。それぞれの力について説明します。

## 1. 根っこになる

「根っこ」とは、人としての礎（いしずえ）のこと。大きな木には立派な根っこがあるように、人にも、栄養分をしっかりと吸収する根っこが必要です。根っこがしっかりしていれば、幹や枝葉が強くなります。根っこをつくるにはさまざまな力が必要ですが、行事育には、文化、愛情、食べもの、知識などさまざまな“栄養分”が含まれていて、その人の人生を支える力になります。子育て自体が、子どもの根っこを育てていることだといえるので、行事育で上質な栄養分を与えることが大切です。

## 2. 絆になる

絆は心の結びつきです。たとえば、お正月に親戚が集まると家族の結びつきが深まり、地元のお祭りに参加すると「地域」のつながりを感じます。行事には、家族や親戚などの「縦の絆」と、地域や友だちなどの「横の絆」をしっかり結び、暮らしの基盤を整える役割があります。

とりわけ効果的なのが、親子の絆です。行事は毎年繰り返されるので、毎年その時期が来るたびに、まるで“思い出ボタン”が押されるように記憶がよみがえってきます。たとえば、「お正月には家族で鏡餅を飾ったな」という情景が毎年思い出されるでしょう。自分が家族に愛されて育ったという思い出は親子の絆を強め、かけがえのない宝になります。

## 3. 心豊かになる

日本の行事は季節の風物詩となっているので、行事に触れることで風流を解する心や感性を育み、万物への慈しみや思いやりの心も育ちます。

注目したいのは「お陰さま」の心です。日ごろ私たちを陰で支えてくれるさまざまな物事（人、自然、祖先など）への感謝や祈りの気持ちが育ちます。昔からよくいわれる「お天道様が見ている」「天国で見守っている」などの表現にも通じるので、道徳心や自律心の成長も促します。

## 4. 賢くなる

行事は文化を伝承する場でもあります。年長者から年少者へ家や地域の文化を伝えていくものでした。そのため行事に親しむうちに歴史やしきたりに触れ、知識が増えます。行事を行う際には、「これにはこんな意味があるよ」「これを〇〇に見立てて食べるんだよ」などと子どもに意味を教えると、表面的なことにとどまらず知恵を育むことができるでしょう。そのほか、挨拶の仕方やことば遣いなど礼儀作法を身につける機会にもなります。行事は毎年めぐってくるので繰り返し学べ、去年は理解できなかったことが今年に理解できたというお子さんの成長も発見できます。

## 5. 元気になる

お祭りなど行事に参加すると、わくわくして元気になれる気がしませんか？行事には元気になる力が備わっています。

古来、「ハレ（晴れ）」と「ケ」という概念があります。ハレはお祭りなど行事がある非日常を指し、ケは毎日の仕事などをこなす日常を指します。平凡な日常が続くと気力が枯れてパワーが落ちてきてしまいます。そこでハレの日には行事を楽しみ、ごちそうを食べ、晴れ着を着るなど気晴らしをして元気になり、ケの日常に戻っていきます。こうしてハレとケを繰り返しながら日本人は生きてきました。また、行事にはお供えもの（食べものを供える）をするものが多く、これが行事食として食文化を支えてきました。行事食を用意して家族で食べるだけでも、子どもがわくわくするはずですよ。

子育て中は何かと忙しく、行事育は幼稚園や保育園にお任せにしていたというご家庭もあるかもしれません。ですが、子育て期間は過ぎてしまうと意外と短いものです。行事育は子どもの未来につながっていると考え、ぜひ楽しみながら実践してください。それぞれの行事の意味や目的を知ったうえで、ご家庭でできることを工夫して楽しめるといいですね。

和文化研究家 三浦 康子

古を紐解きながら今の暮らしを楽しむ方法をテレビ、ラジオ、新聞、雑誌、Web、講演などで提案しており、「行事育」提唱者としても注目されている。連載、レギュラー多数。All About「暮らしの歳時記」、私の根っこプロジェクト「暮らし歳時記」などを立ち上げ、大学で教鞭もとる。著書『子どもに伝えたい 春夏秋冬 和の行事を楽しむ絵本』（永岡書店）、監修書『季節を愉しむ366日』（朝日新聞出版）ほか多数。